

川口プランにおけるカリキュラムの作成と単元学習の実際

Organization of Curriculum and Practice of Unit Study in the Kawaguchi Plan

中山 厚子

Nakayama, Atuko

1 はじめに

敗戦直後は教育現場は混乱し、教師は何を根拠に教えたらいのか、戸惑っている状態であった。

このような時、川口市では川口中学校長梅根悟の提唱により、川口市教員懇談会が結成され、市内約500の教員の有志が集まり、多いときは数10名が、少ないときでも数名が会合を月に1、2回もっていた。さらに、東京帝国大学（現東京大学）の海後宗臣・矢口新ら若手教育研究者の集まりである中央教育研究所が、新教育の理論を川口市で実践することを試み、川口市全教員を網羅した新教育研究会が誕生した。この会の研究は「川口プラン」と呼ばれるものとなり、新しい教育の方向を示唆するものとして、全国発表され、全国の関係者から高く評価され、教育の指針の一つとなった。

その川口プランが、数年にして大きく後退してゆく。絶大な評価を得た川口プランが何ゆえに実施されなくなってゆくのか。地域と学校の連携が提唱されている今日、川口市全地域と学校の連携が図られた川口プランを再生し、現在の教育課題を解決し、生き生きとした学びを生じる手だての一つとはなりえないのか。

いのか。

本論では、川口プランの実践に取り組んだ教師たちが学習のカリキュラムをどのように作り、学習を実践したのかを明らかにすることで上記の二つの問題を考察する。

研究方法としては、川口プランの実践のリーダーであった村本精一の文献や聞き取りを行ない、また、実践の中心となっていた前原忠吉の資料を検討する。また教育界のリーダーでもあった岡登益蔵他の座談会の資料を検討するという方法をとった。

2 川口プランの発足一座談会「社会科教育のあゆみ」から

昭和21年の6月に地理が、10月に歴史が再開され、翌22年には新しい学習指導要領が発表される。川口プランの構成は、その前後になされた。

「座談会 社会科教育のあゆみ」（『埼玉教育』1966（昭和41）年11月）では、次のように川口プランの発足当時の様子や推移が語られている。〈〉は、筆者。

岡登益蔵〈浦和市立高砂小学校長〉：わたくしが川口へ転出したのは22年で、ちょうど六三制が実施され新しい指導要領が発表

キーワード：川口プラン、地域教育計画、カリキュラム、単元学習

Key words : Kawaguchi plan, education plan and the community, curriculum, unit study

された年でした。コース・オブ・スタデーという名前からして珍奇に感じ、どうにもとまどったものです。あちこちの講習に引っ張り出されましたが、従来の中央集権的な国家統制を排し、地域社会の実態に即したカリキュラムをわれわれの手で自主的に編成するのだと説いてまわったのを覚えています。

地元の川口では、すでに川口市社会科学習課題表ができており、その年の3月九段中学校で発表した矢先でしたから、意気大いにあがり、指導要領など読むな。川口プランひとすじに進めよといった雰囲気さえありました。もっとも、その後指導要領の趣旨が川口プランと矛盾せず、むしろ川口プランは、指導要領によって客観的に認められたと解されたようですが――。

川口プラン構成のことについては、村田先生がおられますから――。

村田孝之〈川口市船戸小学校長〉：梅根先生の提唱で「川口市新教育研究会」が発足したのが21年でした。この年の春、米国教育使節団が来日しましたが、その情報として、教育制度が全面的に改められ、修身・地理・歴史が廃されて、それに代る新しい教科が登場するらしいということが聞かれたわけです。梅根先生など中央の動きをよくご存じだったのでしょう。新教育研究会の中に、いち早く「社会科委員会」を作って活動を開始したのでした。（表1参照）

村本精一先生を委員長とし、高橋政芳、前原忠吉、小林徳之助といった先生方が中心でした。指導者としては、中央教育研究所の飯島・田口・磯野といった若年所員が専任でついてくれました。

司会；**小高一郎**〈川越市立福原中学校長〉

川口プランは、公式には「川口市社会科教育計画」と銘打って発表されていますね。その構成の手続きはどんな手順だったのですか。

村田：まず地域社会の実態調査から始めたのでした。いわゆる社会機能法によって、社会的機能の果たす施設をポストひとつ電柱一本に至るまですべて調査し、13の小中学校区ごとに生活構成体を抽出、これを分析してカリキュラム構成の素材を蓄積したのです。一方、市民各階層の代表者によって目的決定委員会を構成し、いわゆるソーシャル・ニーズを明らかにして川口市社会の課題を決定、これを基にして、教材構成委員会の手で学習課題に具体化し、児童の発達段階に即して学年に配当したものが、学習課題表（表2参照）だったのです。

司会：九段中学の講堂で発表したのが、その学習課題表だったわけですね。

鳥塚恵和男〈教育局指導課長補佐〉：東京で発表したというのも愉快ですね。

西川好明〈県立浦和高等学校長〉：東京の中央教育研究所の学者と、川口の現場教師の共同研究の成果という意味もあったでしょうが、それにもまして、全国にさきがけて構成された川口プランだから中央でという心意気があったのでしょうか。

村田：たしかに、あのころの心意気はすばらしかったですね。できあがった学習課題表は、一見簡単な表にすぎなかったのですが、これをまとめるまでには、何千枚のカードを作り、これを整理分析し、連日連夜討論を尽くしたもので、新しいものをつくり出す創造の喜びに支えられた精力的で意欲的な当時の研究活動は、今思い起こしてもすばらしかったと思います。

われわれは、文部省の指導要領より先に進んでいるのだという自負があったから、22年に指導要領が出て「指導要領なんか」といった気持ちがあったのだと思います。

岡登：わたくしが川口へお世話になったのは、そうした盛りあがった頃だったのです。

村本先生が新制中学として発足した西中の校長に出られ、前原先生とのコンビで、課題を分析、具体的な単元展開例を続々発表しそれを前原先生が胸のすくような実演授業でみせてくれたものです。私がおったのは仲町小でしたが、飯島先生が担当指導者で若い先生方といっしょに単元構成の仕事に夜を徹したものです。児童中心主義、なすことによって学ぶといった方針で、実にバラエティーに富んだ学習活動を展開したものです。

全市内の小中高が同じように取り組み、その年の12月、3日間に亘って、全市の小中高校が授業を公開し、埼玉会館で全体集会をもち、川口市社会科教育計画の全貌を発表したのですが、実に壮観だったですね。**村田**：全国から集った研究者たちも革新的な内容構成と、ざん新な学習活動に驚嘆したものです。

内容構成については前に触れましたが、学習活動も、実に多彩で目新しいものでした。グループ活動、話し合い活動、構成活動なかでも調査・見学・面接などの現場学習は中心的な意味をもっていました。工場・田畑・駅・郵便局・警察署・市役所などすべて教育の場であり、その人びとは皆教師であったわけです。(pp. 29- 31)

3 川口プランにおけるカリキュラムの作成の理論

川口プランは全国研究集会で発表されるが、それに先がけて、中央教育研究所と川口市社会科委員会の共編でまとめられたものが、『社会科の構成と学習－川口市案による社会科の指導－』（金子書房、1947.12.1）である。（以下「構成と学習」と記す。）この著書には、具体的な研究成果としての川口市案（「川口市社会科学学習課題表」として、工業地帯用と農業地帯用の二種類）が収められている（「構成と学習」：pp. 43- 46）ほか、それをベースに、各学校の実情に即して考案された個別の社会科学学習課題表（いずれも1947年度版）も一部紹介されている。幸町小学校案、新郷小学校案、西中学校案、旧制川口中学校案（4年＝第10学年のみ）がそれである。（「構成と学習」：pp. 47- 53）

文部省（当時）から社会科の学習指導要領が正式に発表されたのは、小学校編がこの年（1947年）の5月であり、中・高等学校編は翌6月であった。社会科の授業のスタートは9月1日からとされていたため、これに先がけた川口プランの実践は、当然ながら全国のエド関係者の注目を集めた。

川口プランの地域社会の現実と課題に立脚するカリキュラム構成の理論を知るために、中央教育研究所理事 東大教授、海後宗臣の論文「構成と学習」の第一章「川口市の社会科」の一部を引用し、検討したい。

さてこうした教育の自律的な主體が立てられた際に、教育的内容は如何にして構成せざるべきであろうか。内容編成の企畫はその土地の生活現實から着手してまず進め

られ、これがその地域のものとして體系づけられなければならないのである。何を学習内容とすべきかは、その土地の生活がこれからどんな課題の解決をしようとしているかによって決定されるのである。これが教育内容を編成する基盤である。

實は我々が教育の対象としている青少年も、こうした土地の生活課題のうちに入っ生きてきているものである。土地の社会と切り離された青少年の生活という如きものが存在している訳ではない。教育内容を被教育者たる子供の生活から考えるにしても、それは決して、その土地が当面している生活課題と別に何か切り離された子供の生活があるとは理解されない。子供も又その土地の中で多くの人々と共に今日の生活を営みながら、この課題を解こうとする仕事に結びついているのである。こうした実情であるから子供がもっている生活経験と言っても、それは社会生活上の人々の経験と離れてはあり得ない。その土地が当面している生活の課題、それを中軸として構成されている生活現実のうちから教育を企画してくることは、何を以て学習するかの問題を決定する第一着手となるのである。曾つて教育内容が中央の権威をもって決定されていた際には、唯これに拠っていたのであるが、今日に於いては、その土地の生活現実を基盤として立て直すこと以外に方法はない。

土地の生活現実を基盤としてその中から教育内容を編成することは、従来の教育内容観と異なるために、多くの場合その理は認めてもこれを教育実践の上に現わしてくるものが少ない。これについて内容を編成する眞實はこれ以外には存在しないと

いうことを確認しなければならないのである。我々は青少年を教育してこれを逞しい生活の實踐者としてその土地にいきさせようとしているものである。この考をとることが教育内容を編成する基礎である。(略)……その土地の生活現實に注目し、そこから生活をつくり上げている課題を発見して、この線に沿うて教育の媒介となっている諸内容を採るということは、正しい態度である。そこに科學的な方法が適用せられるならば、生活の中から編成された内容で学習した青少年は立派な生活實踐者とその土地を擔って發展させることができるものとなるであろう。(略)……以上ようになって教育内容の編成が進められたときに、教材の中央統轄がとり払われることになる。それなくして中央統轄の旅が停止されたならば、今日の大部分の教育者は、自律的な教育編成をなす態度もなく、その技術にも訓練されていないために、当惑し或は混乱に陥り、教育は弱体化される結果となる。そこで出来る限り速やかに、こうした自律的体制をつくろうとするのが、我々の希望するところである。こうした方式になるならば、その教育はその土地の生活に深く食いこんで、力ある展開をなすことが明白である。(pp. 8-10)

土地の生活現実を基盤として、その生活現実の中から教育内容を編成するという考えを主張している。このことは、そのまま次に引用する、高橋政芳の論文「第3章 学習課題表の構成 1、学習課題の設定 - その理論と方法」の学習課題設定の理論となっている。

われわれは川口の生活現実とそれが有する課題とを正しく理解し、その発展のために働く情熱的態度とそれにふさわしい知識と能力とを有する実践者の育成を社会科の目的とし、課題表の全般に亘ってこの精神を生かすべく努めた。即ちこの課題表は社会の理解を興えると共に、この理解は常に実践的建設的理解であることを目指して、理解によって直ちに新たな川口社会の建設を目指して実践する如き市民の形成を期しているのである。

故に社会科の学習に於ては単なる既成の知識の傳達を中心とするものでなく、又生活と切り離された実践を強要するものでもない。現実の場面に生活させることにより、生徒自らの力によってこれを理解し、その課題を発見し、これを理解すべき実践的態度と知識技能とを獲得せしめることをその方針としたのである。

かくて現実社会のもつ課題を地盤として、学習課題を設定しようとした。即ち学習課題を川口社会がもつ課題への系列に於て選擇配列しようとしたのである。

従って社会科を従来歴史、地理、公民の諸教科の単なる総合として考えたのではない。郷土における実践者の形成のための教育内容という点から現実の具体的な課題を提出し、これを現実の場面で学習するという形をとって必然的に総合的なものとなったのである。(略)……現実の生きた社会に対しこれを理解する方法として歴史的、地理的、公民的な見方が用いられると考えられる。以上が課題表作製に当たっての基本的な考え方である(略)……。 (pp. 36-37)

と、課題設定の理論を述べている。

4 川口プランの実際

(1) 村本精一の社会科構成と経営

川口市では、教育に特に力を置いていた市長の高石幸三郎と、川口中学校長より昭和21年から市の助役に就任していた梅根悟の熱意で、市内500余名の全教員を網羅した「川口市新教育研究会」が結成された。新制度においては社会科(この科目名は未定であり、川口から社会科の名称が始まったのではないかとされている—村本精一談)が新しい教科として設けられ、この研究会は最初に、社会科を研究課題として取り上げた。

こうして発足した社会科委員会の委員長にまだ川口中学の教諭であった村本が選ばれた。当時は学制の過渡期で、市内の学校は国民学校13、中等学校5、青年学校2の計20の学校があった。社会科委員会は各校2名の委員で構成された。

一方、東京大学教授海後宗臣を所長とする中央教育研究所は、いち早く社会科新設の情報を得、その根本理論を研究し、文部省に先んじて新教科の実践案を作ろうとしていた。その時に、梅根を通して、先行研究の候補地として川口市の取り組みが目にとまった。梅根の仲間であった中央教育研究所の海後勝雄が、同じく研究所の矢口新とともに梅根を訪れ、川口市をモデル地区としたい旨と協力を申し出た。梅根の指示で村本は直ちに研究所長の海後(宗)を訪ねた。戦火に焼け出されて書店の二階に仮住まいし、研究所の事務所としていた海後(宗)に会いに行ったという。鳩ヶ谷に住んでいた村本は戦後の食糧不足の時代のこと、リュックに芋や野菜をいっぱい詰め込んで土産に持って行ったという。海後

（宗）は提携には「市内の全部の学校の一致協力」が条件であると語り、村本はそれを約束して共同研究を承諾した。この約束のもとに「川口市新教育研究会」が実働を始め、川口市は梅根の裁量で予算も計上された。

川口市は鋳物工業で有名な土地であるが、商店もあり、周辺部安行等には田園が広がり植木、盆栽の栽培や農業も盛んであった。そこが子どもたちの生活の場であり、ここで生きていく人間としての生き方を学ぶのが川口の社会科の第一の目標と捉えられた。即ち、実践の場で習得した知恵を整理して抽象化された知識となしていくのが真の学問であるとした。

社会科委員会は市内の地域を小学校の学区単位に区分けし、学校は生徒を通学班ごとに分けて地域を決め、それぞれの地域の社会を構成するあらゆる生活構成体をくまなく抽出することにした。この調査を、各学校の最上級生が足を使って漏れなく行い、以下のように分類された。

- ①公共施設——市役所・警察署（略）…授産所・代書屋・電力・ガス会社等
- ②交通通信——駅・郵便局・運送店（略）…ポスト・公衆電話・主要道路・橋（略）…
- ③農業関係——農場・温室・種苗園・植木盆栽園・牧場・主要農家・養鶏・養魚場その他
- ④工業関係——工場・（略）機会修理・醸造所・（略）工業製品検査所その他
- ⑤商業関係——商店・同業組合・（略）銀行・質屋・保険会社その他
- ⑥接客業——旅館・下宿屋・アパート・料理屋・喫茶店食堂その他
- ⑦文化関係——学校・幼稚園・託児所・図書館・

- 博物館・公民館・研究所・新聞社その他
- ⑧宗教関係——寺院・神社・教会その他
- ⑨娯楽関係——映画館・劇場・（略）ダンスホール・玉突き・マージャンクラブその他
- ⑩健康衛生関係——病院・（略）産院・保健所・浴場・理髪店・美容院その他
- ⑪名勝古蹟——城址・遺蹟・古墳・貝塚・名所・記念碑・墓地その他

社会的機能により地域別に分類した生活構成体制

生産（鋳物工場、ビール工場、みそ工場、鉛筆工場、田畑、種苗園）

消費（八百屋、魚屋、青物市場、配給所、（略））

交通通信（川口駅、運送会社、郵便局、電話局、放送所）

健康（保健所、病院、産院、塵埃焼却場、下水道）

保全（消防署、火ノ見、警察署、交番、荒川の堤防）

政治（市役所、市会）

教養娯楽（学校、公民館、映画館）

（「構成と学習」：pp. 18- 21）

この分類から、地域別に一覧表を作ると、川口市の社会構造の全体像が明確になった。鋳物の街と言われてきた通り、全市に鋳物工場は295、鉄工所が182、機械工場が203あり、それらは市の中心部に集中していた。委員会はさらに、鋳物行の起源、立地条件、資本金、製品の種類、材料、技能、従業員数、企業形態、経営の現状、労働災害、労働組合等々の調査を進め、教師のみならず工場経営者や労働者が協力し、他の生活構成体も、市民の協力のもと同様な調査が行われた。

社会科委員会は、この実態調査をもとに、

市民生活との関係や問題を解き明かしていくことで、社会科のカリキュラムを作っていくと考え、川口市の課題を明らかにするための『目的設定委員会』を作った。この会の趣旨を理解して参加したのは工場主、労働者、商店主、篤農家、医師、市長、市会議員、青年団長など20数名であった。

最終目的である学習カリキュラムを作成する作業が、構成委員会に委ねられ、高橋政芳を中心に、児童生徒の発達段階に合わせてカリキュラムを作成し、学習計画は、各校の実情に沿ってそれぞれに決定されていった。村本は川口市立西中学校の校長に任命され、西中学校社会科学習課題表(昭和)22年度(表2)を作成し、4月から各月各学年ごとに、目的設定委員会の定めた目標に沿って内容が決められていった。〔構成と学習〕村本精一「第二章 内容構成の基礎としての社会調査」: pp. 16- 35)

(2) 前原忠吉の単元学習

前原は 表3のような作業を通じて単元が計画され、個々の授業案の作成がされるのが川口プランの実践段階に求められるべきであるとし単元の学習指導案を作成した。(表5)

① 単元のもつ意味を考える 単元作成の「単元のもつ意味を考えるの「単元」とは、川口市案を基準に各学校が自校の実態にあわせて作成した「学校プラン」の一覧表における学習課題テーマのことである。前原が勤務していた西中の学校プラン(表2)では、9月に「川口の鑄物工業」、続いて10月から11月にかけて「川口の産業」が単元に位置づけられている。が、川口市案においては、中学一年の【生産】領域(社会機能)では「川口と鑄物工業」と「川口の産業」が標準単

元としてあげられている。〔構成と学習〕: pp. 181- 182) 西中の学校プランでは同様に、7月に単元「衣料問題」【消費】領域が位置づけられているが、川口市案においては、「衣料問題」とされている。西中案では川口市案中の【健康】領域の「公衆衛生」は、6月の単元として配置されている。西中の第1学年には、入学当初の四月に川口市案にはない単元「学校」が独自に設けられている。

前原は「学習計画の第一歩は、教師が学習単元に対してそれがどんな意味をもっているかを知ること」〔構成と学習〕p. 64) とするときの「意味」とは、川口市の地域社会においてその学習材が担っている「機能」を指している。前原が作成した単元「学校」の学習指導案を例に検討すると、「新制中学校の現実、彼等の期待に対して余りにも貧困である。校舎は足りない、机も腰掛けもない、先生も不足、こうした幾多の問題は中学生としての彼らの誇りと期待を一場の夢として葬り去らんとしているのである。この事実は到底看過するわけにはいかない。生徒はこの新しい学校について十分な理解をもち、こういう学校の現実を打開しようとする積極的な協働者として立たねばならぬ。」〔構成と学習〕: p. 132) という現実を踏まえ、川口市案に設定されていた「市民の文化と娯楽」を変えて扱っている。前原は、「彼等がこの生きた生活の課題を身を以って解決し、学校生活の意味を真に理解すること」〔構成と学習〕: p. 132) と単元の意味をとらえ、市案を変え、「学校」を設定し、単元構想を立てた。1947年発足の西中は、六・三制施行の初年度に川口市に新設された6校の新制中学の一つだが、開校当時校舎も校地も持たず、飯塚小学校の空き教室を借用していた。初代校長に着任した村本

は、市立女子商業高校の校舎を一部借り受け、前原ら力量のある教師を集め、学校づくりをしていたという状況下での前原の単元の一つであった。

② 単元のねらい＝「主眼を設定する」

川口プランにおける「主眼」とは、「単元のねらい」と同義である。単元「学校」の主眼は、「学校の生活現実のもつ課題を解決させつゝ、学校の社会的文化的な意味と機能とを理解させる」（「構成と学習」：p. 133）で、「川口市の教養文化生活のあるべき姿と現実とのギャップから来る課題の解決が中心となる」（「構成と学習」：p. 133）。「学校生活の現実」に立って、それを批判し、その改善を意図しつゝ、学校のもつ社会的な意義、文化的使命を可能な限り実践を通じて理解させ」（「構成と学習」：p.133）るという意図から設定されている。「実践」は、「彼らの生活の中にある問題を捉えて、それを現実の生活の中で解決させ」（「構成と学習」：p. 134）るという観点に立っている。

③ 「題材の分析をする」 「社会科が現実の課題を解決せんとする意欲から出発する教科である限り、机上で学習計画が立てられるべきではなく、また事実机上では出来ないのである。」（「構成と学習」：p. 65）と述べ、実際に現場に出て調査をすることの重要性が力説され、単元「学校」では、以下の9項目について「題材の予備調査」が実施されている。

i 学校の校舎内外の設備、ii 川口市の学校の教育費、iii 川口市と全国の学校の種類と分布、iv 学校の行事・経営の方針・指導法、v 学校の歴史、vi 学校に関係ある役所およびその系統、vii P T A 等学校をとりまく協力団体、viii 学校の生徒数・職員数（本校・川口市・全国）、ix 教科書や教科課程、である。前原はこれら

のすべてを細密に調査したが、iiiとvについては思うように資料が準備できず、情報資料収集の困難さを指摘している。（「構成と学習」：pp. 134-135）

④ 「児童の生活の実態調査を行う」 子どもたちが題材についてどの程度の認識をもち、どのような課題意識をもっているかを把握するために、前原は、4つの質問事項に回答させる質問紙法を用いている。（表4）（「構成と学習」：pp.135-136）

⑤ 「学習指導案を作ること」 学習指導案作成について、前原は①学習内容の設定②問題の設定③学習活動の構成④時間配当その他（適要）と記している。それらが学習指導案の横軸の項目となっている。「題材の分析」と「児童の実態調査」の結果を総合して学習指導案が作成されるべきであるとしており、単元の学習指導案の事例が表5である。

学習活動は内容に応じてさまざまである。絵やグラフに描くこと、劇化すること、地図や年表をつくること、作文に綴ること、紙芝居や模型をつくること、標語や詩や俳句をつくること、実物を集めること、新聞記事を集めること、調査・見学・訪問・聞き取り調査をすること、発表することなど、多岐にわたって検討される。これらの学習活動は、形式化したり、単なる発表のための活動になったりしてはならないことも指摘されている。

（3）全国に向けての研究発表

全国発表は、まず、1947年3月29日、東京の九段中学校を会場として全国新教育協議会が開かれた。この会場にて、桜田プラン（東京都港区：桜田小学校）と北条プラン（千葉県館山市：北条小学校）とともに、川口プランの概要が発表された。当日の『埼玉新聞』

1947.3.29には「…この研究は全国教育界から注目されていたものでマ司令部教育専門家も日本の民主的教育の上に非常な興味を注いでおり同発表によって児童教育の新方向を示すものと期待されている。」と、紹介されている。

また、村本精一の報告「川口市における社会科構成、経営について」に引き続き、「社会科学習の実践研究」と題して、合計7人の実践報告が予定されていることを報じている。川口市新教育研究会（社会科委員会）は、この集会で川口プランの作成プロセスと川口市案（社会科学習課題表）および社会機能ごとに単元を選んでの学習指導の実際を発表する形式をとった。桜田プランや北条プランが一校だけの単独のカリキュラムであったのに対して、川口プランは川口市内全部の学校によって実践された全市的教育計画だったことにより、特に注目を集めた。

その後もその理論と実践は、浦和市埼玉会館および川口全市の小中高校を会場にして開催された全国研究集会においてあらためて発表されている。この集会には全国各地から、約千人の教育関係者が参加している。記事を整理すると表6のような日程であった。全国研究集会について、前出「座談会 社会科教育のあゆみ」で、次のように語られている。

西川：批判も相当厳しかったですね。

村田：何しろ中央の学者全国のベテランたちのことですから鋭い批判がありました。視野の狭い人間ができればはしないか。客観的な知識理解はどうか。抽出して課題が大人本位に傾き子どもの要求が満たされていない。真に子どもの問題意識になっているか。学習の深まりが疑問。全教科のカリキュラムに基礎づけられたプランでなければな

らないといったことがその主な物だったように覚えています。

岡登：川口の子どもがみんなのもの〈鑄物〉みたいになってしまわないか、なんて冷やかされましたね。

福島正<久喜町立久喜小学校長>：世界性をどうするのか。日本の歴史を知らないでよいのかといった声もありましたね。

西川：そうした問題が、社会科についてあとあとまで論争点になるわけですね。まあ、いろいろ批判はあったけれど発足したばかりで混迷していた社会科に、ひとつの拠りどころ、あるいは方向を与えたという点で、高く評価されましたね。

福島：川口プランに次いで、全国的には桜田プラン、北条プラン、明石プランなど地域プランが発表されましたですね。埼玉県でも川口の研究と並んで各地に研究意欲がもりあがりますが――。

司会：司会者から言うのは何ですが川口の研究がすすめられていた頃、自分たちの研究をどのようにしていったらよいかということで、いずれの学校もみな苦しんでいましたですね。比企の三保谷小・中学校でも地域の生活課題の探求、そして生きて働く知識の形成に焦点をおいて精力的に仕事をしたものです。（三保谷プラン）その頃県内各地に新教育研究の動きが起きて、研究校の自主的な連盟が生まれました。（「埼玉教育」1966年11月号p. 31）

<この座談会は、「埼玉教育」1966年11月号 pp. 28- 38に掲載された。1966年8月23日に、農林会館にて行われ、上記の発言者の他に、織本重義県社会科教育研究会長・川口女子高等学校長が紙上参加し、豊田重穂埼玉県

教育研究所長が参加している。>

全国発表をはじめ、社会科を中心に県下各地で研究はもりあがったが、新教育の推進者は社会科担当者が多く、こうしたムードに、他教科担当者からの批判もあったようである。また、「それに、社会科学の専門でない革新的な教育学者からの発言が社会科をリードしていた傾向が強く、社会科内部からの批判も強かった。後の総合かセパレートか、生活か系統かの論争は、この辺にすでに根ざしていたと思う。（「埼玉教育」1966年11月号p. 31）」（西川）という発言も看過できない。1949（昭和24）年ごろから、地域プラン構成の行きづまりが見え、県の基準カリキュラムの構成の必要性が問われ、実験地区の研究が広がってゆく。

考 察

川口プランは発足したばかりで混迷していた社会科に、ひとつの拠りどころ、あるいは方向を与えたという点で、また、他の教科のカリキュラム作成の契機をつくったという点で、高く評価される。しかし、その実践は子どもの興味・関心、子どもの生活課題と地域社会の課題とをつなぐという教師の力量が問われるものであった。

敗戦後の混乱が残る中、教師たちが、新しい民主的な教育観をどれだけ理解できたのかという視点で文献資料を読み直し、当時かかわった関係者に聴くと、教師が児童生徒と学習するとき、川口市という地域社会の中での生活者としてどのように発想し、学習をとらえていたのかという点で教師に意識の差があったことがうかがえる。これらのことから、川口プラン後退の理由として次のことが考えられる。

1、中心になる実践者がリードしていたが、新教育研究会の会員一人ひとりの中に、実践の根が、広がっていかなかった。児童生徒が生活者として問題意識を持つことを前提とする学習は、教師の従来の教育観をかなり変えなくてはならず、川口プランの教育観を理解し、実践できた教員が限られていた。

2、社会科でなく、理科や国語科として取り組みたかった、という当時教員であった方の声があった。新しくできた社会科案をもとに他教科のカリキュラム編成や実践への転移をはかることがまだできていなかった。

3、実践の推進力となったリーダーが、行政や研究職に入ったり、他市へ異動したりした。さらに、中央教育研究所のメンバーが他地域の指導に移っていった。そのため、地域に根付いた学習であるにもかかわらず、地域に残りプランを実践し続ける人が少なくなった。

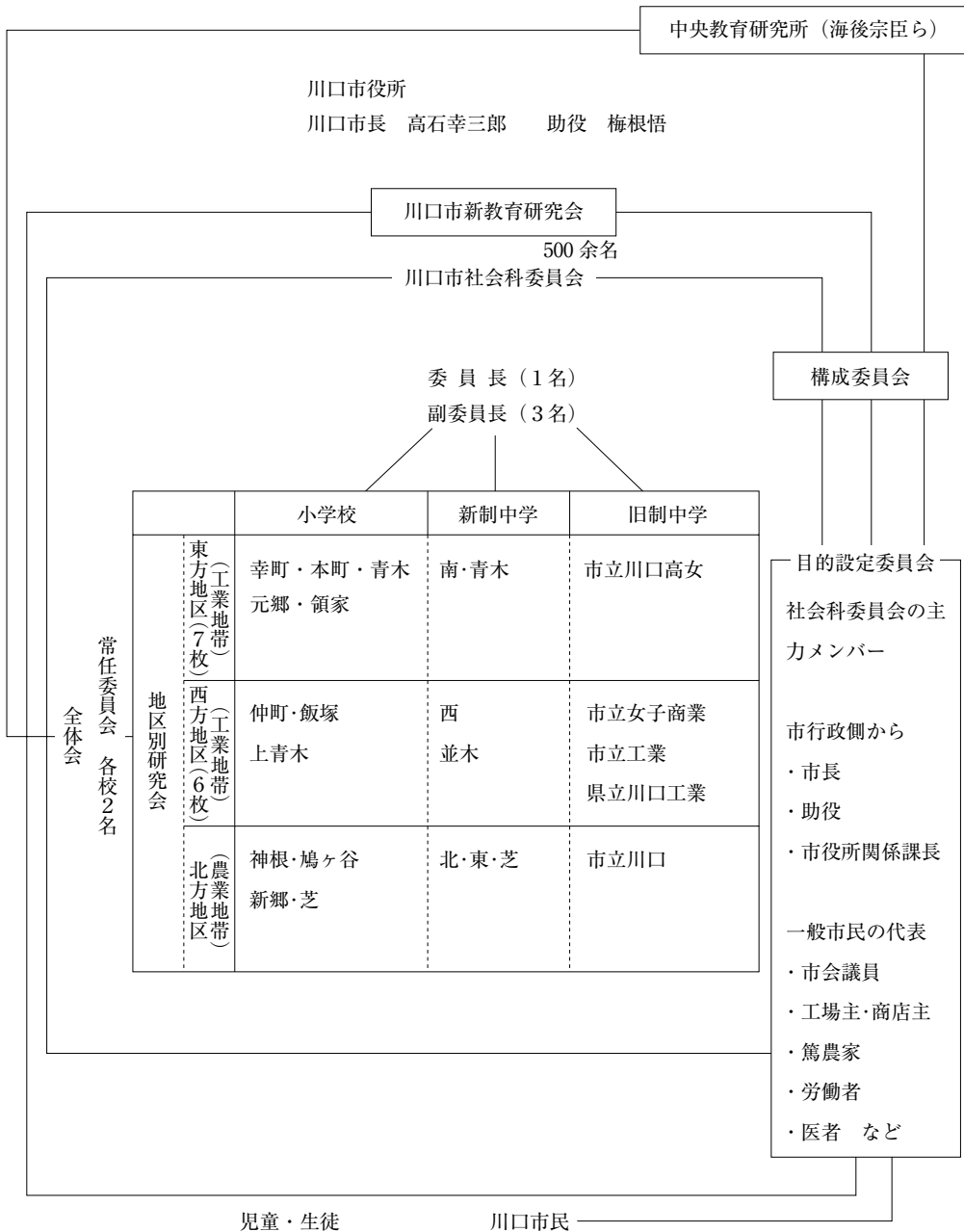
4、この後、昭和24年ごろから、県のカリキュラム研究が始まり、埼玉県基準教育課程が作られ要素表、能力表がだされ、児童生徒に要求される基礎的な知識が明らかにされていった。

衰退して言ったとはいえ、「川口プラン」の継承はどのようになされていったのか。当時の子どもや保護者、地域の人々のリフレクションは、どのように生かされてきたのか。戦後の混乱期に、川口プランが生まれ、実践されたという事実から、今日の地域と学校と家庭とが連携をはかり、生涯に生きる、学ぶ力を育てることを考える上での示唆を得ることはできるのではないかと考える。

<参考文献>

- 池野範男（1986）：「川口市（埼玉県）における実践
－地域教育計画型カリキュラム－」平田嘉三編
著：初期社会科実践史研究会『初期社会科実践
史研究』、教育出版センター pp. 210- 226
- 石井昇（1999）：「川口プランにおける実践」『大
正・昭和の新教育の実践』さきたま出版会
pp. 114- 143
- 市川博（1979）：「民間教育運動団体の中の社会科」
浜田陽太郎・上田薫編『教育学講座10社会科教
育の理論と構造』学習研究社、pp. 94- 119
- 岡登益蔵 岩上進他編『日はまだ高い』中央社
pp. 42- 49
- 海後宗臣（1981）：「川口市の社会科」『海後宗臣著
作集<第六卷>社会科・道徳教育』東京書籍。
pp. 349- 358
- 埼玉県史 第六卷「川口市新教育研究会社会委員会
の組織と運営」p. 446～448
- 埼玉県立教育センター編「埼玉教育」（1966）：11月
号pp. 28- 38
- 中央教育研究所・川口市社会科委員会共編（1947）：
『社会科の構成と学習－川口市案による社会科
の指導－』金子書房 pp. 7- 182
- 中央教育研究所（1947）：『社会科概論』金子書房
- 伏木久始（2004）：「川口プランにおける授業設計と
学習指導の実際」『信州大学教育学部紀要』第
114号 信州大学教育学部 pp. 181- 191
- 前原忠吉（1949）：『単元学習の実際－中学校社会科
の指導記録－』明治図書
- 村本精一（1958）：「『川口プラン』の実際」梅根悟・
岡津守彦編『社会科教育のあゆみ』（新教育の
実践体験Ⅱ）小学館

表1 川口プラン関係組織



「社会科の構成と学習」— 川口市案による社会科の指導 —
中央教育研究所・川口市社会科委員会 共編 金子書房 復刻 川口市立教育研究所 (pp.16-35)

表 2：西中学校社会科学習課題表（昭和二十二年度）

月年	1	2	3
四月	学校	家の経済	家族制度
五月	市民の文化と娯楽	食料問題	住宅問題
六月	公衆衛生	鉄工業	川口市の保健対策
七月	衣料問題	鋳物工場の経営	市の文化問題
九月	川口の鋳物工業	工場衛生	鋳物工業の将来
十月	川口の産業	工場の教養娯楽施設	川口の産業政策
十一月	近代産業と交通通信	現代文化と交通通信	川口市の交通通信問題
十二月			
一月	裁判所	市の保全問題	社会問題
二月	政府の機構と仕事	議会政治と政党	政治問題
三月			

前掲書（pp.51-53）

表 3：前原忠吉の単元学習の骨子

<p>(1)単元のもつ意味を考える</p> <p>(2)主眼を設定する</p> <p>(3)題材の分析をする</p> <p>イ) 題材の意味する内容に見当をつける</p> <p>ロ) 現場に向いて調査する</p> <p>ハ) 参考文献を集める</p> <p>ニ) 学習に効果的な資料を集めて整理する</p> <p>(4)児童の実態調査を行う</p> <p>(5)学習指導案を作る</p> <p>イ) 学習内容の設定</p> <p>ロ) 問題の設定</p> <p>ハ) 学習活動の構成</p> <p>ニ) 時間配当その他</p>

前掲書（pp.64-68）

表 4：「学校」に関する生徒の実態調査

<p>(1)学校は楽しいところか不愉快なところか</p> <p> どういう事がらが楽しいか</p> <p> どういう事がらが不愉快か</p> <p>(2)学校で便利だと思っている点はどこか</p> <p> 不便を感じている点はどこか</p> <p>(3)学校では何を教えるか、それは何のために教えるか</p> <p>(4)学校のいろいろのことは誰がやるか○をつけよ</p> <p> 先生、 父母、 自分、 他の社会人</p>
--

前掲書（pp.135-136）

表5：「学校」（西中学校）の学習指導案

題 目： 学 校			
主眼： 学校の生活現実の持つ課題を解決させつつ学校の社会的文化的な意味と機能を理解させる			
学 習 内 容	問 題	学 習 活 動	摘 要
1. 学校のもつ施設はそれぞれ教養に関する意味をもつ A 設備状況調査 B 設備改善計画	A 今学校には設備上から来る不便があるか B 私達の手によってこの不便を取り除くことは出来ないか	A(1)現に体験している設備上の不便につき話合う (2)現にある設備と其のもつ意味を係の教師と対談して調査活用につき討議する（例・ラジオ学校放送計画） (3)必要とする設備を調査し他の教師の意見をも聴いて（必要に応じては他校参観させ）表にまとめ討議の材料とするまとめはグループによりなす B(1)前表を材料として、出来るものと出来ないものと区別させ a 出来るものについてはグループに分担して作業計画表をつくる b 出来ないものは誰がやるか、その費用はどこで出すか又どの位用意されているか教学課に出向き調査して帰り、グラフに整理する（人口一人についての教育費負担の方法他の予算との比較をなさせる）	5時間
2. 学校では社会での生活の仕方を有効ならしめるためいろいろの計画を立てている A 時間割と一日の計画 B 自治組織・クラブ組織・研究組織 其の他	A 今学校でみんなはどんな一日をすごしているか B 今の学生生活をもっと楽しくするために計画的に改めることはないか	A(1)時間割及学校の計画をもとにその生活を図表にして色分けし、各時間時間のもつ意味を聴取して表に加える（例、体育と休憩の時間にはどんなことをするのかなぜそのような時間を設けたか） B(1)不愉快な点につき話し合いをさせ、質問をプリントして、改善方法を広く上級生、教師等に徴し、参考にして、クラブ活動、校外活動に対する組織を計画させる (2)学級日誌を工夫して一日の学級の生活設計をさせる (3)自分の一日の生活設計をさせ、代表的なものを二三発表させ参考にさせる	6時間
3. 学校は社会と一つになって生活を指導するように変わった A 今の教育（日本及アメリカ教育制度） B 昔の教育（教育の歴史）	A 今どんな教育をうけているか B 昔と比べてどんな点が変わったか	A(1)教科の意味、教育の方法、教育の用具等につき、それぞれ専門教師の意見を聴取し、各指導要領一般を参考に調査を研究する。 (2)川口市の各学校を中心に全国的に組織系統を図表にし、且つ分布図をつくり、今の教育制度につき研究させる。研究の材料：（教育基本法、学校教育法、読売政治年鑑） B(1)教科内容、教育方法、教具の変遷を日本教育史、教育辞典を参考に研究させ年代表を作る (2)今の教育の写真と昔の絵とを集め比較させてその変り方がどんなものに影響されたかを考えさせる	発展としては諸外国の教育制度をあげて比較させる - 六三制とアメリカ教育制度 10時間
4. 学校を教養の場として完備することは社会人の責任である A 父母と先生の会 B 生徒の参加	A 学校に対して社会人はどんなに協力しているか B 生徒は如何に参加し得るか	A(1)PTAの規約、役員名簿をもとに協力の具体的な姿を調査会長を訪問して具体的計画に対する意見を聴取する (2)生徒の教育活動についての協力、各種会合の出席等につき討議させる (3)川口市の文化団体の協力を得ようになされている B(1)各種の計画案をもとにして学校建設の協働者として如何に参加すべきかを討議させる (2)将来のことについても感想として語らせる	4時間

川口プランにおけるカリキュラムの作成と単元学習の実際

表 6：社会科研究全国集会日程表（『埼玉新聞』1947.12.5）

第一日目 (12/4)	10:00 開会（於：埼玉会館） 講演「社会科の構成と学習」…… 矢口 新：中央教育研究所 報告「川口市の社会科計画」…… 村本精一：川口市立西中学校 質疑・応答 午後 講演「社会科と政治教育」…… ベル：民間情報教育局教育課長 映画視聴「アメリカの社会科学習の紹介」
第二日目 (12/5)	午前 公開研究授業「川口プランの実践」（於：市内各学校各学年） 午後 研究協議会「社会科の学習形態について」（於：川口中央公民館など市内5会場）
第三日目 (12/6)	午前 パネルディスカッション「川口市の社会科をめぐる諸問題」（於：埼玉会館） パネラー …… 青木誠四郎：文部省教材研究課長 石山 脩平：東京大学理学部 緒方 宗雄：東京大学医学部 尾高 朝雄：東京大学文学部 海後 宗臣：東京大学文学部 午後 自由懇談会（質疑応答）
備考	*期間中は、アメリカ社会科の教科書および児童画なども図書館で公開された。